

日本社会心理学会会報

229号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会 (担当常任理事：三浦麻子)

2022年5月25日

日本社会心理学会第63回大会へのお誘い

永野 光朗

新年度の授業が始まり、会員の皆様におかれましてはご多忙の毎日を過ごされていることと思います。授業の多くが対面となり、学生達の笑顔に接することも多く、ようやく本来の大学の姿を取り戻すことができたと感じておられる方が多いと思います。

今年度の第63回大会は、当初の計画通り、京都橘大学にて9月14日(水)および15日(木)の2日間で対面実施の形で開催する予定です。

5月17日に大会での発表を締め切りましたが、259件の申込みがあり、久々の対面開催を皆さんが心待ちにしておられることを実感し気持ちを新たにしました。さっそくシンポジウム、ワークショップを含めたプログラムの編成作業に取りかかっています。

大会開催校企画のシンポジウムとして「より良い消費社会を実現するためには？—社会心理学の可能性の検討—」を開催する予定です。消費者と企業が相互利益を提供し合う関係性を確立することが個々人のウェルビーイングやSDGSの達成に繋がると考えたうえで、この課題に社会心理学がどのように貢献できるかを検討します。

またこれに加えてワークショップ4件および若手研究者支援の企画もご提供頂く予定です。ぜひ楽しみにして下さい。

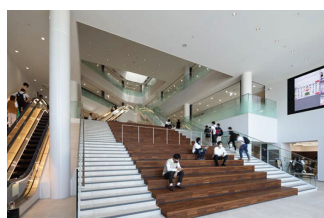
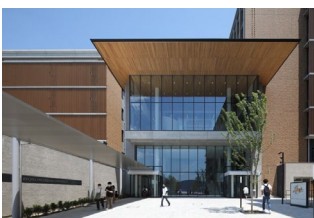
第1報でもお伝えした通り、オンライン開催の学会には様々なメリットがありますが、今回は3年振りの対面開催ということで、その機会を最大限に生かすものになりたいと考えています。

メイン会場となる京都橘大学の新棟「アカデミック・リンクス」は、教室や研究室以外に、学習用スペースや休憩スペースを各所に設けています(写真は京都橘大学広報資料より転載)。

このような施設を生かして、発表の合間に久々に会われる皆さんの間でのご歓談と、社会心理学についての活発な議論を行える機会を提供できればと思っております。

また久々の京都への来訪を楽しみにされている方も多いと存じます。「京都らしさ」を感じていただける企画も検討して参ります。第63回大会で皆様にお会いできることを心から楽しみにしています。

(ながの みつろう・京都橘大学)

大会Webサイト：<https://www.socialpsychology.jp/conf2022/>

第9回春の方法論セミナー報告・参加記

報告

第9回春の方法論セミナーは、「QRPs(問題のある研究実践)への向き合い方—オープンサイエンス時代の研究術—」と題して2022年3月19日(土)にオンライン(Zoomによるウェビナー形式)で開催されました。登録者数428名(会員:非会員=6:4程度)、参加者数340名、同時ビューの最大数322名と同様と見做すことができました。ご参加くださった方の中から次のECR(Early Career Researcher)のお二人に、参加記の執筆をお願いいたしました。

参加記

山本 晶友

冒頭から失礼を承知で、あえて正直に申し上げます。今回の方法論セミナーの概要を読んだ時に「既知っている話が大半になりそうだから参加しなくても良いかな」と思ってしまい、参加予約を保留にしておりました。そのままセミナー1週間前頃になり、他の予定に目途が立ったため「一応」と思い参加予約をさせていただき、参加記のオフアをいただき、背筋が伸びる気持ちへシフトしつつ参加に至りました。この段落はほぼ失礼なことしか書いていないのでどうか最後までお読みください。

セミナーの冒頭、相馬先生による企画趣旨のご説明の中で、false-positive psychologyに関する2014年の方法論セミナーに触れられ、当時のことを思い出しました。2014年3月、私は学部生で、かつ社会心理学のゼミに所属していなかったこともあり、会場校の学生ではあったものの方法論セミナーという企画を知るアンテナがありませんでした。そして翌年4月から社会心理学研究室のM1となった後、「会場が上智、しかも学部生の時に社会心理学を教えてくださいあの竹澤先生が登壇者に」という素朴な興味から動画で拝見しましたが、*p-hacking*どころか共変量などの基礎的な統計知識も不十分だった私は、時間をかけてじっくり観ても理解に至れないところが多々ありました。

そんないわば“論外”だった私が、今年の方法論セミナーの概要を読んで「知っている話が大半になりそうだ」とさえ思うに至っていました。また、小手先で綺麗な実験結果を出して真実から遠のくよりも、研究者の自由度を下げQRPsを防ぐ研究実践をする方が良く、当然のごとく思うことができしております。これは、当時から本セミナーのような企画や議論が継続されてきたからこそであるように思います。研究者としての価値観を形成していく院生時代に、QRPsについての議論の盛り上がりが高まったのは幸いでした。このように思いを巡らし、本セミナーのような企画の価値を再認識いたしました。私にもたらされたこのような効果が生じている方はたくさんいらっしゃると思います。

また、「知っている話が大半になりそうだ」と最初は思っていた私が、実際に参加して感じたことが、他にも大きく分けて二つあります。一つ目は「知らない話は沢山あった」です。これは主に大坪先生によるトップジャーナルの動向や、山田先生が後半にご紹介くださった内容から感じました。トップジャーナルでオープンサイエンス化がmustになりつつあることは、他の多くのジャーナルの議論でも引き合いに出され基準枠となることが見込まれるので、朗報であると思います。一方、事前登録にも抜け道があることや、OSFが凍結されかねない事態が一部で起きているという現状は悲報でした。良い意味でも悪い意味でも、QRPsに関する議論は、まだまだ今後も注目する必要があると思われ知らされました。

感じたもう一つのことは「研究者自由度を下げる実践は、見ている人は見ている」です。事前登録の作業には、端的に言って手間がかかります。私は最近、事前登録に用いるフォーマットを「AsPredicted.org」から「OSF Preregistration」に切り替えましたが、前者に比べ後者は特に手間がかかります。サンプリング停止のルールなど、必要な項目が事細かにあるからこそその手間であることは理解できますが、煩雑さに心が折れて、「なぜこんなにも手間をかけねばならないのだ」と思うこともしばしばあります。また、事前登録通りにサンプリングをすることはいつでも簡単に上手くいくわけではないため、事前登録の作業が終わった後にも自分に対する制約は続きます(それが本来の目的なのですが)。このような時に、村山先生による「堅い研究」こそが人事でさえも評価されるというお話は、事前登録付き研究を行うことが無駄な努力ではないと思える励みそのものです。また、学生指導の中で事前登録通りにサンプリングをしようとして苦勞をなされたという竹澤先生の今回のお話は「苦勞しているのは自分だけではない」と思える励みとなりました。第一線で活躍されている日本の先生方からこういったお話を聞いたことで、事前登録付き研究を行うモチベーションは間違いなく上がりました。

このように、「既知っている話が大半になりそうだから参加しなくても良いかな」という当初の直観は誤りであったと気づき、知識の面でも実践モチベーション向上の面でも、本セミナーに参加させていただいて良かったと思うに至りました。企画者、登壇者の先生方をはじめ、本セミナーの開催にご尽力くださった方に心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

(やまもと あきとも・上智大学)

参加記

謝 新宇

心理学の再現性問題が議論され始めたここ十数年に、それへの対応が多く心理学者に求められるようになってきています。実際、再現性問題の原因は研究者自身にあるだけではなく、出版社側など多方面にあります。そのため、再現性問題を解決するために多方面との連携が求められています。今年春の方法論セミナーで、4人の先生方は研究者、雑誌の編集者や査読者、教育者など、色々な立場から考え方を共有していただき、連携のあり方を提案してくださいました。先生方のおかげで、心理学研究の未来がより具体的に見えたように感じております。

山田祐樹先生は *p*-hacking (*p* 値を有意水準より小さい値になるよう、分析対象者の選定や分析方法の選択を行うこと) を一例とする QRP に触れたうえで、その対応方法の一つとして事前登録制度を詳しく紹介してくださいました。事前登録制度とは、仮説から分析計画まで一連の計画をデータ収集前に公開しておき、その計画に沿って分析を行う制度です。研究実践のオープン化によって、QRPs が生じる余地を減らすことが可能です。所属する研究室でも、昨年から研究を行う前にきちんと研究計画を立て、OSF で公開することが求められています。QRPs への関心が強く、所属研究室の中では事前登録に早くから取り組んでいたこともあり、その体験談を研究室で紹介しました。このときは、OSF 等で公開されている事前登録の内容に必ずしも一貫性がなく、事前登録についてどのように紹介すべきか迷い、苦労しました。もしもこのときに山田先生のご発表を聞いていたとしたら、迷わずに済んだように思います。OSF での具体例を参照しつつ、アカウント作成から事前登録の公開に至るまでの手続きや注意点を丁寧に説明していただき、大変参考になりました。

さらに、村山航先生と竹澤正哲先生は、各研究における仮説導出の根拠となる理論の正確性を重視することの重要性を、研究の具体例を交えつつ説明してくださいました。この重要性は「どれだけ研究手法を極めて、QRPs を防ごうとしても、正しい理論を持たなければ、誤った科学的知識が広まってしまう」という、竹澤先生のお言葉に表れていると感じました。「研究を評価する際、まずは“これは本当にありえる結果なのか”と自身の心に尋ねる」という村山先生のお言葉も印象に残りました。結果の新奇性を求めすぎると、その再現可能性に目が向かなくなってしまうように思います。実際、表情フィードバック仮説やマシュマロ実験など、有名な心理学研究のいくつかは結果が再現されていません。このような状況だからこそ、新しい理論を提案・構築する良い機会のように思います。だからこそ、自分には村山先生の「下剋上のチャンス」という言葉が特に心に響きました。少し極端な言い方になるかもしれませんが、チャンスを生かそうとする姿勢を持つことで、結果として心理学の再現性問題が乗り越えられるのではないかと私はそう思っています。

QRPs と真摯に向き合い、対応する姿勢を育て、守るためには、研究者本人だけではなく、学術誌を出版する側の取り組みも大事です。なぜなら、仮説を支持する結果の方が、支持しない結果よりも学術誌から発表されやすいという出版バイアスが QRPs の原因のひとつになるためです。学術誌（を有している出版社）が、事前登録やデータのオープン化に取り組む研究を肯定的に評価するような取り組みも大事だと思いますし、村山先生と竹澤先生のお話にあったように「意義のある研究」という基準から脱却し、研究方法の「堅実さ」からそれぞれの研究を評価することも重要なように思います。その中で大坪庸介先生から、オープンサイエンス化に向けて、雑誌「社会心理学研究」にオープンサイエンス・バッジを導入する計画があることをご紹介いただきました。実際、海外の雑誌（特にトップジャーナル）は既にデータの公開を求めています。オープンサイエンス化は単に QRPs への対応になるだけではなく、科学的コミュニティに求められる「知恵の共有と創発」に直接貢献するように思います。このようなオープンサイエンスの仕組みを導入する雑誌がこれからも増えていくことに期待しつつ、それが実現されることが楽しみです。

他に、大規模共同研究、研究のモジュール化など、新たな研究の方向性を先生たちから共有していただき、研究指導を行う立場からの対応についても紹介していただきました。わたし個人としては、これらの話も魅力的だったために、本当であれば紹介したいのですが、残念ながら紙幅の都合上、ここで割愛いたします。再現性問題を抱える心理学は科学として問題を有しているのかもしれませんが、ですが、この問題と向き合い、できることから進めていくことで、そう遠くない将来に心理学のあり方が、そして他の分野からの見え方が変わっていくように思います。若手研究者のひとりとして、その日を迎えるためにも、今回のセミナーでご紹介いただいた内容を胸に、「堅い」研究を重ねていくことを頑張りたいと思っています。

最後に、本セミナーを開催するにあたり、講師の先生方々、そして企画・運営していただいた学会活動関係者の方々に心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

(しゃ しんう・広島大学)

セミナーWeb サイト：<https://www.socialpsychology.jp/seminar/seminar2.html>

ターン 有加里 ジェシカ氏「第12回日本学術振興会育志賞」受賞

ターン 有加里 ジェシカ

昨年度、本学会のご推薦をいただき、第12回日本学術振興会育志賞受賞(<https://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/>)の栄に浴すことができました。身に余る光栄に存じます。本稿では第一に、本学会のご推薦を今後受ける方々にとって少しでも参考になることを願い、受賞に至るまでの経験を述べさせていただきます。また、私の学部時代の恩師が、名誉ある賞をいただくことの良さは、お世話になった方々へ公の場で感謝を伝えられることにあるとおっしゃっていました。そこで本稿では第二に、お世話になった方々へのお礼の言葉を述べさせていただきます。

<受賞に至るまでの経験>

今回の受賞の対象となった研究は、私が修士課程一年生の頃から関心を持ち続けてきた「ボランティアのジレンマ」を対象にしたものでした。ボランティアのジレンマとは社会的ジレンマの一種で、集団のうち誰か一人が集団のためにコストを負担しなければいけない状況を指します。このボランティアのジレンマでは、誰か一人がコストを負担することが最も効率的である一方、その一人だけがコストを負担することは不平等でもあります。人々はこの効率と平等の対立にどう対処しているのかということをお私に研究してきました。

本学会から育志賞に推薦していただくにあたり、自身の研究をまとめた書類を提出する必要がありました。過去に行ってきた複数の実験や調査の結果を限られた分量にまとめることには苦戦しました。これまで目の前の実験や調査に集中しすぎて大局的な見方ができていなかったためだと思います。良かったことは、自身の研究をまとめる作業の中で、自身の研究の核は何であったのかを真剣に考えるきっかけが得られたことです。そのおかげで、自分は何に強く関心を持っていて、これから研究をどう発展させていきたいかに関する新たな気づきがありました。この書類作成の経験だけでも私にとっては大きな実りがあり、書類選考を通過できなくても満足だとさえ思えたほどでした(もちろん通過できるのに越したことはありませんが！)。

書類選考が終わると、次は面接選考に招待していただきました。常々プレゼンに対しては苦手意識を持っていたため、招待を受けてから選考当日までの短い期間に面接の準備をしなければならないことには焦りを覚えました。しかしここで書類作成の経験を思い出し、自身の研究の核が何であるかを意識したことで何とか準備を進めることができました。その際に特に注意したことは、その核が他分野の先生にも伝わるかということです。選考当日は、審査員の先生方から様々な質問を受けることができたので、伝えたいことは伝わったのだと感じました。或る先生は私の研究分野の歴史についての質問をくださり、また或る先生はそもそも心理尺度とは何かを考えさせられるような質問をくださり、これまで自身が自明のものとして扱ってきた事柄に関して考えさせられる大変良い機会となりました(すべての質問に上手に答えられたわけではないので、色々反省もしております)。

<感謝の言葉と今後の抱負>

以上のように、育志賞をいただくまでの過程は私に多くの気づきを与えてくれました。本学会会長の岡隆先生のご推薦がなければ、このような貴重な経験をすることはできませんでした。本学会活動委員会の相馬敏彦先生は、育志賞に関する諸々の手続きをしてくださるだけでなく、その過程で応援の言葉もくださり、大変心強かったです。その他、関係者の先生方のご尽力に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

私が大学院に入学したときからいつも温かく見守ってくださった指導教員の唐沢かおり先生と研究室の先輩の橋本剛明先生は、快く推薦状を書いてくださりました。面接選考を前に不安を見せていた私に、「ターンさんの明るくて素直な性格をそのまま出せば大丈夫」という趣旨のお言葉(曲解してはいたらすみません)を唐沢先生からいただいたことは、一生忘れません。また第9回育志賞を受賞された河村悠太先生には、面接審査に際して丁寧なご助言をいただき励まされました。その他にも、書類審査や面接審査を前にエールをくださった先生方、選考のための書類やプレゼンを丁寧にしてくれた学部時代からの友人や夫には本当に助けられました。ありがとうございます。

上では受賞に直接関わる先生方へのお礼を述べさせていただきましたが、そもそも、私に研究の面白さを教えてくださり大学院に導いてくださった先生方、また、学会や研究会や読書会や大学院の授業を通じて私の研究へのフィードバックやサポートをくださった先生方のお力がなければ、私はこれまで研究を進めることはできませんでした。ここでひとりひとりのお名前を挙げることはできませんが、いつも心から感謝しております。

今回は僥倖なことに育志賞をいただくことができました。これは私にとって大きな励みとなりました。その一方で、良い研究をするためには今後もまだまだ多くのことを学ばなければいけないと感じており、一層気持ち引き締まる思いでもあります。社会に貢献できる研究者を目指して精進してまいりますので、皆さま、どうぞ引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(たーん ゆかり) じえしか・東京大学大学院



2021年度若手研究者奨励賞 選考結果のお知らせ

2021年度若手研究者奨励賞は、21件の応募があり、4名の選考委員による厳正な採点と審査の結果、以下の7名を受賞者と決定いたしました。受賞された先生方、おめでとうございます。選考に時間を要し、予定より決定が遅れましたことを、心よりお詫び申し上げます。

選考過程

7月5日に募集開始をホームページで告知し、メールニュースでも会員に告知した。締め切りは例年通り9月30日とした。

選考委員選出と一次審査

応募総数21件に対し一次審査を行った。選考委員は応募書類に記載された指導教員を除いて、理事から1名、一般会員から3名について常任理事会の承認を得て依頼した。

選考委員（敬称略）

- 理事より：浦光博（追手門学院大学）
- 一般会員より：内田由紀子（京都大学）、中西大輔（広島修道大学）、森久美子（関西学院大学）

審査方法については、従来の手順を踏襲し、この時点では選考委員は互いに匿名で審査をおこなった。各応募に対して、A（優れている）、B（普通）、C（やや劣っている）を付与するものであった。なお、A評価は各委員7本以内とした。また、1名の選考委員から1件の応募に対して、利害関係の申告があり、その応募について当該選考委員は審査に加わらなかった。

第二次審査

第一次審査結果について従来の得点換算方法に従い、A評価を40点、B評価を10点、C評価を5点とし、各応募について合計得点を算出し、その後メールでの審議を行った。

この時点で同順位となった応募に対して再度順位付けを行った。最終的に上位7件を受賞対象とすることで合意し、常任理事会と理事会に推薦した。

講評

浦光博先生（追手門学院大学）

研究計画の評価の視点にはさまざまなものがあるだろうと思いますが、今回私が重視したのはテーマの斬新さと計画の手堅さの2つです（おそらく多くの方がこの2つの視点で評価されるのではないかと思います）。これらの視点で今回の応募書類を見ると、斬新かつ手堅い計画のものもあり、逆に斬新でもなければ手堅さも評価できないものも残念ながら見受けられました。これら2つの差は実にはっきりしていて、前者はすべてあるいはほとんどの審査者から高く評価され一次審査の段階で授賞対象となり、後者はすべてあるいはほとんどの審査者が低く評価し一次審査の段階で授賞候補に残れませんでした。

難しかったのは、手堅いけど斬新さが今ひとつのものと、斬新だけれども手堅さが今ひとつのものの評価です。どちらかに重きを置かないと差をつけにくくなります。今回私は斬新さの方をやや重視して一次評価を行いました。全体の評価結果を見ると、そのような研究計画については評価が割れていました。審査者によってどちらを重視するのかに差があることの表れだと思います。

これらのことが示唆しているのは、確実に高い評価を得るためには斬新さと手堅さの両立を目指さなければならないということです。これは当たり前のことのように思われるかもしれませんが、若手とカテゴライズされる研究者にとってはかなり高いハードルではないかと思います。そんな中でも、今回提案された研究計画の多くがこの高いハードルを越えることを、少なくとも目指してはいたように見え、心強く感じたことも確かです。若手のみなさんのさらなる健闘を期待しています。

内田由紀子先生（京都大学）

今年度はじめてこちらの審査に携わらせていただきました。研究の将来を担う若手の関心事がどのようなところにあるのかを知ることができるのは、とても興味深く、役得だなあと思いながら審査を行わせていただきました。

研究の方向性や方法論が多様化しているためか、評価者間で意見が分かれたところもありました。コロナ禍を経て、オンライン実験の手法が定着してきたことも実感しました。しかしながら、データや分析の可能性が広がったとしても、どのような理論的背景に立脚して自分なりの「問い」をたてて研究を行うのか、そうしたポイントを明確に論じられていたものが必ずしも多かつたわけではありませんでした。理論は大きいけれども実際の細かいところが詰め切れていないとか、逆に細かいところは整理できているが理論的な視点や発展性をはっきりしないということもありました。これらは実際にはとても難しく、研究計画を立てるときに常に頭と時間を使うところです。受賞が決まった7件のテーマはいずれも目的と方法も明確であるということが一貫していたと思います。これからの若手研究者の発展を楽しみにしております。

中西大輔先生（広島修道大学）

若手研究者奨励賞の審査をはじめ担当しました。主観的には大学院生時代からほとんど成長がなく、ずっと若手のつもりでいたので「僕自身が若手なのに、どうして依頼が来るのか」と悩むくらい、自分が既に初老（なんと辞書的には40歳!）と呼ばれる年齢を超えていることに気づいておらず、愕然としたものです。それはともかく、「本物の若手」の研究者の計画を拝見するというのはたいへん楽しい作業でした。

私は勝手に、社会心理学の根本問題はマイクロ=マクロの循環過程の解明にあると思っていますが、奨励賞に選ばれなかったものも含めて、そういった問題関心を持っているものが数多く見られて社会心理の未来は明るいと思うことができました。大学院生時代に講座の恩師たちから「社会心理学に未来はない」という嘆きを繰り返して聞いてきましたが、審査が終わった今では「いや、案外いけるかもしれない」としています。もちろん「未来はない」という危機感がよい研究の刺激となったのも間違いのないでしょう。ただ、再現性問題を踏まえた事前登録の実施やデータの公開について述べられていたものが1件だけだったというのは少し気になります。事前登録やデータの公開が当たり前になればいいなと考えています。

大学院生が減っているという問題もあるようで、学会として引き続き若い人たちにとってよい環境を作っていく必要性を感じています。次年度以降もたくさんの意欲的な若手研究者からの応募を期待しています。

森久美子先生（関西学院大学）

若手研究者奨励賞の審査に携わるのは今年度が初めてでした。申請書は工夫が凝らされた高い水準のものが多く、たくさんの新鮮なアイデアに触れることができたのは委員として大きな喜びでした。一方で、選考過程では絞り込みに難しさを感じました。研究意義の明確さや面白さ、研究方法の工夫や妥当性を念頭に評価しましたが、迷ったときには「その研究独自の魅力が際立つ研究」に惹かれました。実際、多くの委員から共通して高く評価された研究は、研究目的を読んだだけで、その研究が解こうとしている問の面白さが明確に伝わってくるものであったと思います。もちろんどの研究計画も、その領域内での研究の意義についてははっきり訴えておられたと思うのですが、バックグラウンドの異なる複数の委員全体に伝えるためには、自分の研究のインパクトがどこにあるのかについて、当該領域だけでなくやや広い視野の下で自覚的である必要があるのかなと感じました。採択とならなかった研究にも優れた緻密な計画や社会貢献性の高い計画がありました。それぞれの先生方のご研究の成果が実り、発信されることを期待しています。

お名前	研究タイトル	ご所属（2021年度）
野間 紘久 (のま ひろく)	抑うつスキーマの機能的側面による非機能的な 帰結：スキーマの維持メカニズムの解明	広島大学大学院人間社会科学研究所 博士課程前期2年
松村 楓 (まつむら かえで)	無知の自覚が社会政策に対する態度の緩和に及ぼす 影響 —個人実験及び小集団討議実験による検討—	大阪市立大学大学院 前期博士課程1年
宮崎 聖人 (みやざき まさと)	一般的信頼および見知らぬ他者と協力する傾向が 両方高く学習される条件の検討	北海道大学大学院文学院 修士課程1年
高橋 茉優 (たかはし まゆ)	社会保障はなぜ崩壊しないのか —デフォルトの 効果とマキシミン選好に着目して—	東京大学大学院 修士課程1年
岡田 葦生 (おかだ あしゅう)	政治的会話回避の要因としての多元的無知	京都大学大学院法学研究科 博士後期課程2回生
李 述水 (り じゅつひょう)	社会的排斥経験が相互協調的自己観を形成する 生物学的なメカニズムの解明	玉川大学大学院 修士2年
森 隆太郎 (もり りゅうたろう)	「協力する気のある人しかここにはいない?」: 集合行為を支える自主的な参加のメカニズムの検討	東京大学大学院人文社会系研究科 修士1年

選考結果 Web サイト：https://www.socialpsychology.jp/award/wakate_2021_2.html

会員異動（2021年10月1日～2022年5月23日）

入会

《正会員》

・一般

DE ALMEIDA IGOR（京都大学人と社会の未来研究院特定助教授），飯干 諒祐（医療法人丹沢病院主任），五百竹 亮丞（広島文教大学人間科学部人間福祉学科助教），碓金 義騎，遠藤 仁（三田記念病院医局医師），小口（田中） 峰樹（玉川大学脳科学研究所特任准教授），河口 真一郎（株式会社 MSC インターナショナル代表取締役社長），残華 雅子（奈良教育大学 ESD・SDGs センター），瀬川 裕美（京都大学人と社会の未来研究院），叢 暁波（創価大学創価教育研究所教授），戴 瀟城（株式会社センタン研究員），高橋 彩（三重短期大学生活科学科准教授），匠 英一（デジタルハリウッド大学デジタルコミュニケーション学部教授），田中 友理（多摩大学経営情報学部専任講師），田邊 美奈子（放送大学教養学部学生），中尾 元（追手門学院大学経営学部講師），中川 正悦郎（成城大学経済学部准教授），西川 一二（京都大学教育学研究科研究員），秦 正樹（京都府立大学公共政策学部准教授），バヤスガラン オユンツェツェグ（中央学院大学現代教養学部准教授），藤 桂（筑波大学人間系心理学域准教授），松下 戦具（大阪樟蔭女子大学学芸学部／化粧ファッション学科准教授），松森 嘉織好（玉川大学脳科学研究所），山岡 あゆち（法務省東京少年鑑別所地域非行防止調整官補），與久田 巖（奈良大学社会学部心理学科）

・大学院生

MAYNARD Emily Nicole（京都大学大学院人間・環境学研究科），青木 麻里子（名古屋大学大学院教育発達科学研究科），足立 吉規（名古屋大学大学院教育発達科学研究科），伊規須 敦史（名古屋大学大学院情報学研究科），池谷 彩希（広島大学大学院人間社会科学部研究科），伊藤 みなみ（追手門学院大学大学院心理学研究科増井啓太研究室），井上 秀一郎（関西大学大学院総合情報学研究科），井上 心太（関西学院大学大学院社会学研究科），上田 皐介（名古屋大学大学院教育発達科学研究科山形伸二研究室），上田 寛（広島大学大学院人間社会科学部研究科），上野 桃歌（東京女子大学大学院生人間科学研究科人間社会科学専攻），大坪 快（九州大学大学院人間環境学府），岡村 百香（京都大学大学院教育学研究科），奥田 麻依子（京都大学大学院人間・環境学研究科），奥山 智天（一橋大学大学院社会学研究科），賈 琴（広島大学大学院人間社会科学部研究科心理プログラム），川村 樹（北海道大学大学院 文学院 人間科学専攻 行動科学講座），菊池 辰哉（神戸大学大学院人間発達環境学研究科），北 哲子（東京大学大学院人文社会系研究科），呉 長億（大阪市立大学大学院文学研究科），黄 林章（早稲田大学大学院文学研究科），米谷 充史（神戸大学大学院人文学研究科），佐野 秀（明治学院大学大学院心理学専攻），志水 勇之進（愛知淑徳大学大学院心理医療科学研究科），張 時毓（東北大学大学院文学部研究科），菅沼 秀蔵（東京大学大学院人文社会系研究科），相馬 ゆめ（北海道大学文学院文学院人間科学専攻行動科学講座），戴 澄葦（群馬大学社会情報研究科），高橋 えり（関西大学大学院総合情報学研究科），張 琬瑜（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科），趙 曉辰（宇都宮大学大学院地域創生科学研究科），陳 小羽（関西大学大学院総合情報学研究科），辻本 光英（北海道大学大学院文学院人間科学専攻行動科学講座），中島 裕人（大阪市立大学大学院文学研究科），棗田 みな美（広島修道大学人文科学研究科），西辻 好花（大阪大学人間科学部人間行動系社会心理学研究室），濱田 龍（駒澤大学人文科学研究科心理学専攻心理学コース），比留間 圭輔（青山学院大学大学院社会情報学研究科），廣田 貴也（立命館大学大学院 人間科学研究科 人間科学専攻人間科学研究科），藤川 真子（広島修道大学人文科学研究科心理学専攻），堀内 惇（放送大学文化科学研究科），松岡 慧人（名古屋大学大学院情報学研究科 心理・認知科学専攻），三浦 拓海ガナ（名古屋大学大学院情報学研究科），南 ミサ（大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科），森川 華帆（名古屋大学大学院教育発達科学研究科），楊 帆（日本大学文理学部文学研究科），李 莹钰（文教大学大学院情報学研究科），李 葦理（大阪大学大学院人間科学研究科/行動学系/社会心理学専攻），劉 星廷（京都大学大学院教育学研究科），劉 澤宇（立命館大学大学院人間科学研究科），劉 放（早稲田大学大学院文学研究科），廉 志顕（立命館大学大学院人間科学研究科），若井 大成（東京大学大学院教育学研究科），渡邊 寧（京都大学大学院人間・環境学研究科）

《準会員》

大塚 蒼人（放送大学教養学部教養学科心理と教育コース），劉 俣杉（大阪大学人間科学部）

退会

足立 英彦，阿山 光利，荒牧 央，蘭 千壽，井関 紗代，伊藤 清隆，宇宿 公紀，遠藤 由美，大井 晴策，大島 尚，大田 舞，岡本 真一郎，梶間 幹男，金井 篤子，川崎 賢一，川名 好裕，岸 俊行，吉良 文夫，グエン ホアソラン，黒住 嶺，齋藤 治道，佐藤 賢輔，渋谷 由紀，清水 和秋，冷水 啓子，鐘 文煜，白樫 三四郎（物故），白須 友教，神 明里，鈴木 伸哉，高木 真理

子, 高沢 佳司, 高田 咲季, 田胡 巴瑠子, 田島 綾乃, 田中 理恵子, 中村 修, 中村 和彦, 中村 倫子, 沼尾 優希, 野上 達也, 八田 紘和, 原 惇一郎, 広瀬 幸雄, 廣瀬 竜太郎, 藤井 貴之, 布施 美鈴, 古澤 聡司, 松本 芳之, 三重 雛子, 山本 佑実, 山脇 三千代, 湯田 彰夫, 若林 佳史, Shreya Wagh

所属変更

秋山 学 (神戸女子大学心理学部), 荻野 正美 (近畿大学経営学部キャリア・マネジメント学科), 安念 保昌 (札幌保健医療大学保険医療学部), 大高 瑞郁 (東洋大学社会学部社会心理学科), 松本 みゆき (名古屋大学教育基盤連携本部), 下田 麻衣 (京都ノートルダム女子大学), 松尾 藍 (北陸学院大学人間総合学部), 片平 誓子 (境港市教育委員会事務局生涯学習課), 大谷 宗啓 (滋賀県立大学), 麻生 奈央子 (東京福祉大学心理学部心理学科), 高 史明 (東洋大学社会学部), 中川 由理 (高崎商科大学商学部経営学科), 澁谷 寛 (早稲田大学大学院経営管理研究科), 谷口 友梨 (滋賀県立大学), 井川 純一 (東北学院大学), 後藤 崇志 (大阪大学大学院人間科学研究科), 中嶋 智史 (人間環境大学総合心理学部), 伊藤 健彦 (法政大学経済学部), 大崎 裕子 (立教大学社会学部現代文化学科), 寺口 司 (株式会社原子力安全システム研究所), 佐伯 昌彦 (立教大学法学部), 新井 さくら (Psychological & Brain Sciences, University of California, Santa Barbara), 手島 啓文 (宮城県), 川久保 惇 (埼玉学園大学人間学部心理学科), 白木 優馬 (愛知学院大学), 豊島 彩 (島根大学人間科学部), 法 ケイ (復旦大学(Fudan University)), 野崎 優樹 (甲南大学), 静間 健人 (東日本大震災・原子力災害伝承館), 正木 誠子 (日本大学文理学部社会学科), 打田 篤彦 (追手門学院大学共通教育機構), 谷辺 哲史 (埼玉県立大学保健医療福祉学部健康開発学科), 木川 智美 (松山東雲短期大学保育科), 長峯 聖人 (東海学園大学心理学部心理学科), 松本 桂 (東京学芸大学大学院連合学校教育研究科), 松尾 朗子 (東京大学先端科学技術研究センター), 大戸 朋子 (法政大学多摩地域交流センター), 柴田 侑秀 (北海道大学社会科学実験研究センター), 横井 良典 (京都橘大学健康科学部心理学科), 鈴木 啓太 (立命館大学総合心理学部), 古橋 健悟 (科学警察研究所), 前田 楓 (立教大学現代心理学部心理学科), 黒川 優美子 (神戸学院大学心理学部), 高野 了太 (東京大学大学院人文社会系研究科), 山本 琢俣 (早稲田大学教育学部), 片山 拓海 (海上自衛隊), 下司 忠大 (立正大学心理学部対人・社会心理学科), 佐野 有利 (立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科), 浅野 良成 (慶應義塾大学法学部・日本学術振興会特別研究員 (PD)), 中村 日海里 (アクセント株式会社イノベーションセンター福島), 小野 由莉花 (京都橘大学健康科学部心理学科), 友野 貴之 (札幌学院大学心理学部), 小野 拳 (新潟こども医療専門学校教務課), 杉浦 秀一 (放送大学大学院文化科学研究科), 岡田 葦生 (関西学院大学大学院社会学研究科), 田中 友理 (多摩大学経営情報学部), 堀内 惇 (放送大学文化科学研究科)

『社会心理学研究』掲載 (予定) 論文

第 38 巻第 1 号 (2022 年 7 月刊行予定 (6 月 J-STAGE で早期公開予定))

【資料論文】

小城 英子・坂田 浩之・川上 正浩 不思議現象に対する態度尺度改訂版 (APLe II) の作成

編集後記

先日, 金沢で開催された JST さきがけ「パンデミック社会基盤」の「領域合宿」に参加しました。2021 年 4 月に発足したチームで, 事務担当者も含めて既に何度も (Zoom で) 顔を合わせた間柄ですが, 「どうも, 実物です」と挨拶を交わすのがなんとも「うれし恥ずかし」という心持ちでした。やはりリアルには圧倒的な味わい深さがあると再認識したのですが, さてその成分ってなんなんだろうと考えると, 集団の創造的活動についてなら対面とオンラインの比較研究をしていたはずなのに, 難しい。今のところ「味の素並みの複合構造をしているはずだ」としか言えません。9 月の京都, 考えただけで暑おすが, 是非会場で無沙汰のお詫び/初めましてのご挨拶をいたしたく。(三浦 麻子・広報担当常任理事)